

立場と意見（4・1・18）

河野健 二（昭12・文丙）

おことわり

昨年（一九九二年）一月一日、私は三高会館で「世界と京都」と題してスピーチをしました。何しろ冷戦後の世界情勢の目まぐるしい変化とその思想的含蓄を話しなから、京都論に及ぶというテーマを立てたものですから短時間ではいかんともできず、結局このスピーチは無残な失敗に終わりました。最近になってその折の録音を文章にした原稿が手許に送られてきて、『神陵文庫』に収録されるという話を聞きました。

そこで何とか責めを果すことを考えまして、三高会館でのスピーチから二カ月ほど経って、私は当時勤めていた京都市立芸術大学を退職する機会に関西日仏学館で退職

の講演をしたことを思い出し、その録音原稿（これは現在私が所長を勤める京都市生涯学習総合センターが作ってくれたものです）を利用することと致しました。「立場と意見」と題したこのスピーチは、ほぼ同じ時期のものですから考え方に違いはありませんが、問題を思想と学問に限っていますので、まとまりがよく、わかりやすいと思います。

なお、この講演会について、私は四月二日付の京都新聞への寄稿文のなかで触れていますので、その部分を引用しておきます。

卒業式から一日おいて、三月二一日、私の退職を記念する講演会が日仏学館で開かれた。音楽学部の広瀬量平先生のアイデアで、講演の前にピアノの神西敦子先生とチエロの上村昇先生によるシューマン幻想曲の合奏があるという豪華な催しであった。「立場と意見」と題する私の話は、近代史を決定づけた三つの思想を取り出して、そのロマン主義的な性格を論じ、またそれぞれを相対化して現実への適用を可能にした知識人の貢献について論じたものであった。その三つとはフランス革命を生み出したデモクラシーと、その一層の徹底化を説いた共産主義またはマルクス主義、さらにこの二つと方法と立場を異にするナショナリズムである。

講演のあとに、ワッセルマン館長のご好意で三階の応接室をお借りしてのワイン・パーティーがあった。広瀬先生は私の話が、ベートーベンとシューマン、ブラームスとのかかわりとまったく符合するといつて喜んで下さった（注、ベートーベンはもちろんデモクラシーの体験者であり、幻想と愛に殉じたシューマンはロマン派、また普仏戦争での勝利の曲を作ったのはブラームスであった）。間近に迫っていた神西、上村両氏の「芸術祭典・京」のプログラムは、この三人の曲目で組まれていたのである。

あたかもこの日は「芸術祭典・京」の初日であった。この祭典の実行委員長でもある私は、午前中、鴨川の西岸でオープンした「町衆文化フェスティバル」に駆けつけた。この日から十日間、暇を見てはさまざまな催し物にふれることを日課とした。芸大退職の日は桜咲く好天の一日であった。」

「立場と意見」と題しましたのは、できるだけ学校の講義のようなことはしたくないと思いついて、立場にいろいろあり、意見にいろいろあるというわかりきった話ですが、そういつたことにならうと思つて題をつけたわけです。結局「近代思想の立場と意見」といつたことしか、今の私には材料がありません。そこでデモクラシーという問題が一つと、共産主義、または社会主義という問題が二番目、それからナショナリズムという問題が三番目で、この三つの三題の

ようなことになるかと思ひます。しばらくお聞き取りただければありがたいと思ひます。

このデモクラシー、共産主義、あるいは社会主義、ナショナリズムという三つのものは今から三百年ほど前から世界の主要な国の人びとを動かした思想、あるいは立場だと思ひます。そしてこの三つの思想は、どれをとつても人びとをけしかける思想といひますか、人びとを駆り立て、何かをさせるという強い力をもつた思想であつたと思ひます。つまり人びとに目標を示し、人びとが立ち上がつて行動することを求める、何かをせよという強い力をもつた思想で、そしてこの三つはお互いに関係があります。つまりデモクラシーというものに飽き足らない人びとや飽き足らないという考えが現れてきて、それがあつた場合には社会主義になり、ある場合にはナショナリズムになります。そういうつながりがあるわけです。この三つがつながつて、一八一二十世紀に至るまでの世界を支配してきたといへるのではないかと私は考へております。

この代表的な三つの思想は、単に理論、世の中の理屈はこうだということ教へるのではなくて、こうであるべきである、こうでなければならぬ、これ以外のことはあり得ない、それを認めない人間はけしからんという感性に訴へます。単なる理屈ではなくて、人びとの情念を動かす、感動させる、興奮させるといった力をもつた思想だといひます。先ほどの演奏で聴かせていただいたシューマンは、ドイツの19世紀中期のロマン派、ロマン主義の音楽家ですが、あいつの音楽が表現しているよう人を揺り動かす、人に訴へかけ、そして何かを求めさせるとい

った力をもっていると思います。

デモクラシーの理論を考え出し、表現した思想家としてジャン・ジャック・ルソーが挙げられることは皆さんご承知のとおりだと思います。ルソーの思想もまたブレ・ロマンチズム、最初のロマンティックな思想家といわれておりますように、ロマンティックなところがある思想家です。単に理屈を述べただけではなく、自分の感じ方、ルソー自身が「私は知識においては貧弱である。しかしセンチメントにおいては誰にも負けない」といった言葉を残しております。ルソーは教育について書いたり、あるいはオペラをつくったりしていますし、教育論を小説の形で書いたりしております。そのように芸術家であると同時に理論家であったわけです。ルソーは単なるロマン派ではなく広い意味での合理主義者ですが、その合理主義は、啓蒙派の開明的合理主義ではなく、ロマンティックな合理主義といえますか、彼においては感性と理性が結びついている点に特徴があると思われます。

そういうルソーが政治について書いたものが『社会契約論』『政治経済論』といったものです。これは単なる政治理論というだけのものではなく、悪くいえば毒をもった思想書であるといえます。あるいはマルクスもそうです。マルクスの場合も単に『資本論』で経済組織としての資本主義を分析したというだけではなく、資本主義はまったく人間性に反するシステムであって、なんとかして壊さないといけない。どうしたらそれを壊しうるかということで、プロレタリアートと

いうものを出してくるわけです。労働者階級が団結をして闘うことで壊さなければならぬ。単に認識すること、世界をさまざまに解釈することが問題ではなく、これを変えることが問題であるといったことを非常に力強く説いております。ですからこういう思想は毒があるといえますか、熱がこもっているといえますか、とにかく人びとを駆り立てる影響力をもつものです。ナシヨナリズムといったものもそうであつて、国が危急存亡の淵に立っている。国を救うために立ち上がつて、青年は武器を取らなければならぬといったことを非常に強烈に訴えるわけです。これもまた人びとを駆り立てる思想だと思ひます。

私は三高の学生時代に水泳をしておりますが、背泳なのですが、試合などに出たこともありません。周りに仲間たちが立っていて、頑張れと応援してくれるわけですが、背泳というのは周りに立っている人がよく見えるわけです。つまり応援してくれる人の顔を見ながら泳ぐのは、いかにも辛いものでして、頑張れといわれるたびに自分の力が抜けていくような感じで、却つてタイムは遅いし、負けて、残念な思いをしたことが多いわけです。こういった若いときのことを考えると、頑張れという思想を受け取つて、はじめのうちはルソーは偉いと思ひ、マルクスは偉大であるとしばらくは思つていますが、次第に頑張れといわれるそのことに引つかかるといいますか、くたばれるといひますか、それが何か辛い気持ちになつてしまふわけです。私の学生時代に有力であつた思想はナシヨナリズムです。戦争に直面しておりましたから、ナシヨナリズムの風

潮が急速に強くなってそれに学生たちが駆り立てられて、戦争に行くということを目の前で見
いたわけです。

大学生になって、経済学部だったものだから、『資本論』などマルクスのものに読みふけ
たわけですが、マルクス、エンゲルスのもを読んで、「かかる反動の時代に、単に書物を読ん
で学究として留まろうと考えること自体が革命的である」などと説いたという文章を読むと、
おとなしい私も何かやらないといけないなと思ったりしたものです。

ジャン・ジャック・ルソーの思想は、レジユメに「人民主権」と書いていますように、彼のデ
モクラシー論の基礎にあるのは人民なのです。人民の意志がすべてです。人民というのは常に正
しくて、常に正義を目指しているが、しかし現実には圧迫されている。そういった人民といっ
たものの意志、これを政治の基本原理としています。政治というものは常に人民の意志に従うべき
ものである。人民の意志がすべてであって、その人民の意志は他の誰によっても代表されること
はできないし、またはその人民の意志を立法、司法、行政と分割することもできないし、またそ
の人民の意志を譲り渡すこともできないというわけです。つまり、非常に崇高な主体として、人
民、あるいは人民の一般意志という言葉を使っておます。そういった一般意志が支配する世の中
をつくれれば、世の中はきつとよくなるよといったことを説いたわけです。その上に立って、君主を

どう考えるか、議會をどう見るか、法律はどのように決めるかといったことを詳しく論じております。

要するに、国家の構成要素の一つとしての人民といったものをいわば理想化して、人民は常に正義の体現者であり、自由の追求者である。さらに、人民は常に独立を欲しているという具合に理想の存在としての人民を設定し、そしてこの人民の意志を唯一のものとして認めることよって政治のあらゆる問題は解決ができるという主張を述べたわけです。

これは簡単にいうと、なるほど人民は自由でありたいと思つていようし、幸福でありたいと思つていようし、そのことについて人民の意志というものが一致している、おそらく一致するであろうと考えることはたやすいことです。しかし、人民の意志がすべてであるということだとすると、その人民は何かまとまった考え方もつていて、そしてそれを政治の根本原理にすえて、常に正しい行動をとるということでなければならぬわけです。ところがもう少し具体的に考えて、それではどういった政治の組織をつくればいいのかといったことになると、ルソンの場合は直接民主主義ですから、人民のすべてを一カ処に集める必要が出てきます。ところが彼の考えているような政治はジュネーブぐらいでしかできない。フランスという国はあまりに大きすぎて、人口は2千数百万もいたわけですから、とてもフランスでは実行できないことになりません。

ルソーが『社会契約論』といったものを書いて、およそ三十年ほどしてフランス革命が起こったわけです。フランス革命のなかでも、ルソーがいつていたとおりの社会をつくらなければならぬとい声が非常に強くなって、革命が急進化したわけです。ですからフランス革命とともにルソーの思想の影響は非常に直接的になり、たくさんの人びとに読まれ、受け入れられました。もちろん『社会契約論』を読んだ人は少いのですが、革命中にはたくさんさんのパンフレットが出たり、演説で説く人が出たりして、ルソーに学べといった声が非常に強くなります。そしてルソーの意志を引き継ぐと称する人も出てくるわけです。ロベスピエールという人はその最も代表的な人です。

しかし、それでは人民はいま何を望んでいるかということになると、具体的に考えれば人によって違ふと思ひますし、あるいは時期によつて違ふ、場所によつて違ふということにならざるを得ません。人民を全部集めて意見を聞く方法もないし、集まる場所もありません。また同じときに全人民が集まることは元来不可能なことです。ですから政治を行なうためには、どうしても、代表者といつたものを選んで議会といふものをつくらざるを得ないわけです。

ルソーの考へでは議会といつたものは人民を代表していると称してゐるけれども實際は議員は自分の利害関係で動くのだから、人民の意志を代表してゐると見るわけにはいかなひ。ですから議会には反対だと、ルソーはいつております。また政党といつたものも特殊な利益になつてい

る人たちの集まりだから、部分的な集団であり、人民という全集団ではないわけです。単一の集団ではない。ルソーの場合には、政党といったものも存在が許されないわけです。そうなりますと、ルソーの思想の非現実性、趣旨はいいけれども、人民の意志をどうして確かめるのか、人民が何を考えているかをどうして知なのか、誰がその意志を表現するのか、そういった問題に直面するわけです。

そこで、フランス革命の直前に有名になったシエースという人が、ルソーのいう人民というのは具体的には第三身分のことだというアイディアを出します。第三身分というのは三番目の身分であって、貴族でもなく、僧侶でもない。つまり平民といえますか、それが当時第三身分といわれていたわけです。そういった特権身分でない人間、市民がルソーのいう人民だという考え方に立って、彼はフランス革命が始まるのと同時につくられた議会のなかで具体的に活動します。ルソーは人民といっているが、しかし人民のすべてが政治に参加することは不可能である。ですから市民を能動的市民（積極的市民）、受動的市民（消極的市民）との二つに分けて、そのうちの能動的市民が政治に参加する。それから能動的市民のなかでまた、代表を選ぶといったことだけをする市民と、代表に選ばれてもいい市民を分ける、つまりルソーがいていた理想としての人民を具体化することを考えて制度化を成功させます。こういった考えが定着して、議会といったものを具体的に構成することになって、すべてが進行することになるわけです。

つまり、そこで示されていることはデモクラシー、人民の政治というものが、具体的に一つのシステムとしてできあがるためには、単に人民による政治ということを行っているだけでは不十分であつて、いかにすればそういったメカニズムができ、有効性を發揮するかということを考えなければ意味がないというわけです。そのメカニズムを考えたのが、シエースという人です。

この人は革命議会の最初のとくに華々しく活動をするわけですが、だんだん議会が急進化していきます。戦争があつたり、国王が逃亡したり、国王が戦争に加担していることがわかつて来たり、革命が次第に急進化するわけです。そしてそのときにロベスピエールという人が、自分はルソーを最も崇拜している。ルソーの意志をそのまま議会に実現しなければならぬといったことを説きます。ですから彼は先ほどの市民を能動市民と受動市民に分けること自体に反対をして、すべての人間に選挙権を与えなければならぬという主張をするわけです。それは革命の状況のなかで、一時的にたくさんの賛成者を得ます。ロベスピエールが政権を取ったとき、「人民」とは具体的に何を指すかが問題となります。ロベスピエールがいったのは「サン・キュロット」ということです。サン・キュロットというのは当時の言葉で、下層市民ということです。キュロットをはかないで、長ズボンをはいている市民。当時は貴族などの上層階級は短い半ズボンのようなキュロットをはいていたのですが、普通の市民、民衆といったものが本当の人民であるとロベスピエールは主張したのです。

そういった人民はどこにいたかといえますと、それはパリの市役所を占領していた人たちがコミューンといったものをつくっていたのですが、そのコミューンの指令に従った人びと、あるいは下町の名もなき民衆であって、そしていつも騒ぎがあると真先に駆けつけて、実力行使をするというそういう人たちです。そういった人びとこそ人民であると、ロベスピエールは考えます。

ロベスピエールが実行した非常に大きな仕事は、そういう人たちに呼びかけて、議會を襲撃させたことです。そして合法的に選ばれてきた議員たちを大量に追放したのです。特にねらわれたのは、ジロンド派という人たちがねらわれたです。そのようにルソウの思想がそのまま受け取られると、ロベスピエールのように合法的につくられている議會というメカニズムを破壊して、そこに乗り込んで、正当に選ばれた議員たちを無理やり追放するクーデタを正当化することになり、それが際限のないテロリズムの源泉になります。

つまりそこに至って、いわゆる「全人民」という人民が、パリの下町は48セクションあったようですから、京都でいえば左京区よりもっと小さい吉田地区程度を代表すると称する人たちが武器をもってやって来て、議場を占領して、気に入らない人を追放するといったことになったわけです。ロベスピエールはそういう人民の力を利用したものですから、その人民のいうことに反対するわけにはいかなくなつて、結局無理やりな独裁政治を行なつて、たくさんの人びとをギロチンにかけて、国王も処刑するといったことになるわけです。

そのような思想の役割、一つはルソーの思想をもう少し具体化して、これがシステムとして動くようにするためにはどういったことを考えなければならぬかといった立場をとった知識人と、そうでなくてルソーの思想をとことんまで実現しなければやまないという立場をとった知識人と、そのあいだの違いがここで現れていると思います。思想と社会科学との違いがここにあります。

マルクスの場合も、マルクスが出てきた時代はフランス革命から五十年ほど経った時期で、一八三〇年代から三十年間ほどのあいだです。先ほどのシューマンの音楽が作られた時代、大きくいうとロマン主義の時代です。一種の社会改良主義といえますか、世の中を改造しなければならぬといった考え方に多くの知識人がとりこになった時期です。ですからマルクス主義以外にも、イギリスでのチャーチズムもあれば、ロバート・オーウェンといった人の社会主義もありますし、ドイツのラッサールなど、社会主義を考える人が数多く出てきました。社会を改造して、うまく理想社会をつくり出すことができるという考え方が広がっていった時期です。なぜそういった考え方が広がったかという点、ルソーが先鞭をつけたデモクラシーの社会は、たしかに議会がつくられ、憲法がつくられ、人権宣言がなされ、私有財産制度ができ、競争が始まり、資本主義はどんどん発展していったわけですが、しかしそこから取り残された人びと、労働者や失業者、あるいは貧しい人びと。そういった人びとはデモクラシーの思想では救えないといったことを人びと

が自覚するようになります。

マルクスをお読みの方はご存じですが、マルクスの仕事は非常にラディカルな変革の意志が表現されていて共産主義の理想を説いている文章、それからそれとは別個にまったく理論的に科学主義的に論理を展開したものととの二つの部分からなっています。つまり、科学主義とロマン主義の結合といったことは、マルクスだけではなく、この時代の特徴です。多くの人は、そういった知的な雰囲気の中で暮らしていたわけです。

時代の空気というのは恐ろしいもので、数十年経つと、なるほどあの時代はこうであったかということがわかるわけですが、その時代のなかには時代の特徴はつかめないのです。そういう空気のなかで、つまりマルクスはプロレタリアートというものが眼目である。つまり人民一般といった考えではダメであって、この世の中を具体的に支えているものは労働している労働者階級である。労働者階級の利害といったものを中心にすえて、そして社会を改造しなければならぬと主張します。それが共産主義の理想であったわけです。

『資本論』は経済学批判という副題がついておりますように、今のブルジョワ経済学が教えていることはすべて間違っているという非常に強い批判の立場に立つものです。しかし、そのことと共産主義の理想とは必ずしもつながらない。それがつながると考えた時点でマルクスも、また「時代の子」であったといえます。

マルクスは自分以外の社会主義はすべてユートピアだと書いておりまして、その代表として彼に批判されたのがブルードンです。しかし今から考えるとマルクスの「科学的社会主义」もまた、科学というよりもむしろ一つのアスピレーション、こうなつたらいいという願い、彼の感情、情念の表現と考えるべきではないかと思ひます。マルクスが社会主義とか共産主義という場合は、労働者階級（プロレタリアート）を一つの理想の存在として前提し、このプロレタリアートに奉仕すること、プロレタリアートの利害をあらゆるものに優先させること、それが共産主義の社会をつくる根本だということになります。

しかし、それに対してブルードンという人は、もう少し冷めていたといひますか、そうした夢のようなことを考えても、ダメだと述べています。ブルードンのいいところは、もちろん彼も労働者を中心の問題にすえたわけですが、労働者といつても理想化された労働者ではなくて、現に働いている労働者がどういった利害関係に取り巻かれてゐるか。その人びとが具体的に何を必要としてゐるか、そういったことを考えなければ意味がないという立場を取つたことです。ブルードンの書いたもののなかで「人民銀行」という着想があります。つまり働いてゐる人がいちばん必要としてゐるのはお金だというわけです。お金をどうして手に入れることができるか。それは働いてゐる者たちが、自分たちで少しづつもちよつて、そして必要なところに役立てるといふ仕組みをつくるべきだと考えます。協同組合とか、相互扶助組合、そういった職業組合をつくつて、

それらが連帯の組織、連合の組織をつくる。それを広めていけば、政府に代わる組織ができて、権力支配の根を断ち切ることができると主張します。一種の自主管理の思想です。

自分たちが生産をして、同時に、その生産を搾取している商人とか金融家とかいったものを力を排除していく。それが行き尽くすと政府もなくなることができないかとか考えるわけです。ブルードンの思想は、協同組合主義からアナキズム、それから国際的には国家連合をつくって、主権国家といったものを国際組織のなかに解体すればいいという、今のECとかロシアの共同体などをつくれば国家対立をなくすことができるとブルードンは考えます。彼は社会主義ではありませんが、冷めた社会主義、現実的に考えられた社会主義を考えただけですが、むしろこれからは、そういった社会主義の考え方が生き延びるであろうと思われるわけです。社会主義も思想から脱却して社会システムとなったときに始めて、社会科学の対象になるというべきです。

最後にナショナリズムについてですが、ナショナリズムというのは、理論化といったものにあまり適しないので、これといった代表者を挙げることができません。これは国家、自分たちがつくっている生活の場といったものを必死で守らなければならないという思想でありますから、大した理論を必要としないといえますか、一種の直観的な本能を基礎としています。

ナショナリズムというのは、デモクラシーとか共産主義といったもののいずれにも飽き足らな

いで、それに反対している思想です。デモクラシーや議会政治で一国のあり方を合理的に考えてシステム化することに満足しないで、人間はもっと非合理的でエモーショナルな存在であることを自覚せよと主張します。人間は自分がどの国に生まれたいかということを考える可能性を奪われて、生まれることを余儀なくされており、自分が選択した国や家でないところに生まれたかもしれない。そういった運命に支配されてわれわれは生きていくというわけです。運命共同体という言葉がありますが、そういった存在、われわれは生まれていたいと思って生まれたのではなく、余儀なく生まれてきた。人間は自由だといいますが、むしろ自由であることを運命づけられている心細い存在なのだという考え方です。

そういった考え方、フランス革命が起こったときにフランス革命に非常に早く反撲したのは、イギリスのエドモンド・バークという思想家です。バークは人間のつくっている世の中は歴史的につくられているものであって、頭のなかで考え出して、こういった世の中がいいからこういう世の中にしたのではなく、歴史のなかで決まっていたものである。そういう歴史をつくりだした習慣や生き方といったものを、頭のなかで一刀両断的に明日からやめろと説くのは、人間として尊大すぎる考えであって、必らずや歴史の仕返しを受けるだろう。人間は歴史的存在だということと忘れると、フランス革命のような悲劇が起る。フランス革命は一刻も早くやめなければならぬと説いて大きな影響を与えました。

こういった考え方は社会や政治を合理的につくりかえようという動きが出てくると、必ずそれに対する反作用として出てくるものです。世の中はそれほど理屈どおりにいくものではない。学者が考えるように進むものではないといったことを、いつも誰かが言い出す仕組みになっていきます。つまり進歩派があれば保守派があるわけで、そういった立場は嘘だというわけにもいかない。われわれはたしかに自分で選んだ国に生きているわけではないし、生かされていて、生きることが余儀なくされている状況のなかにいることがある。しかも、私達は親兄弟や近隣の人たちとともに共通の生活文化圏をつくっていて、言葉や習慣を共通にしているから落ち着いて暮らしているわけです。飛行機でいきなりよその国に連れていかれて、明日からここで生活しろとなると、大抵の人は途方にくれるわけです。

国民や国家といったものは、合理性を超えた、固有文化といったものによってつながれているのであって、そういったものを疎かに考えることは間違いであり不幸なことだといったところから、国家や国民の立場をあくまで守らなければならぬといった考え方が生まれてきます。これはエモーショナルな、情緒的な感性に裏づけられた人間の感じ方、人間の思想であって、その国が非常に条件がいい場合は大して問題を起すことはないわけです。しかし、その国が危機的な状況になっていたり、あるいは意識的に敵国といったものがつくられて——だいたい戦争は隣のと戦うもので、あまり遠い国とは戦争したりしません——隣国と利害が対立することになると、

非常に大きな力を發揮するわけです。

近隣の国とあまり問題がないにもかかわらず、隣国が悪いということ誰かが言い出すと、根が単純で情報を持たない人びとは「そうか」と信じやすいわけです。われわれの祖先がつくってきた国が危険にさらされるのを、黙って我慢していいのかといった呼びかけが力をもつことになります。そういったネイションとかナショナル・ステイト、「国民国家」、こういったものは發生的にいうと古くさかのぼれますが、しかし、古代にまでさかのぼる必要はないのです。

だいたい国民国家というのは、フランスの場合でいうとフランス革命の二〇〇年ほどの前に絶対主義の国家ができますが、それが出发点です。つまり国王が絶対権を握って、そして特権身分を従えて、人民に君臨するという国がフランス革命の二百年ほど前につくられるわけです。イギリスでもそうです。つまり国民を主体として、その権力としての国家権力といったものができません。そしてその国家の主権は絶対的であって、これはルソーが人民の意志が絶対的であるといったのと、ちょうどその裏返しです。国王の権利こそ絶対的で不可侵であって、神聖侵すべからざるものである。そして、その国王は国家の利害を代表している唯一の存在である。この国王の権力を守るために、すべての人間は無条件に忠誠の義務を尽くさなければならぬといった国家主義が生まれます。この種の思想は天皇制とともに私たちにとってなじみ深いものです。この思想は根本に地域とその文化（言語・宗教など）への人間の愛着を裏づけとしていて、ただに根ぶかい

ものです。

重要なことは、現在のようになくさんの国家ができてきますと、自分の国だけが唯一最高のものであつて、他の国はすべて劣つてゐるといつた国家中心主義の考え方は事実上通用しなくなるということがあります。イギリス、フランス、ドイツ、あるいはアジアにおける日本といった少数の国家が支配権を握つてゐるときは、そういった国家信仰も簡単に成り立つていたわけですが、非常にたくさんさんの国家ができてくるといつたことになり、しかも国家間の紛争といつたものが實際的に組織や仕組みをつくらなければならぬと解決できない。国家同士では戦争になるだけであつて、第三者的な機関をつくらなければならぬ。あるいは、どの国家をも包含するような組織をつくらなければならぬといつたことになります。これは20世紀の人類が経験してきた非常に大きな教訓だと思ひます。そういった教訓のうえにたつて、国民国家を相対化する作業がさまざまに進行しているのが、世界の現状だと思ひます。

国家の相対比について先ほど述べたブルードンは、国家をまず内部から相対化するということを述べています。それはどうするかというと、中央集権制を改革して地方分権、もっと地方に権限と資金を与える。つまり政府は常に権限を集中しようとする存在ですが、それにブレーキをかけて、地方に権限を与えろといった意味で、地域主義を主張しています。地域、つまり地域の利害といったものをもっと重要なものとして考え、中央政府といつたものは、なるべく小さければ

小さいほどいいわけです。ブルードンの計画によると、中央政府は今でいうとコンピュータだけ備えていけばいいというわけです。地方で何がつくられているか、交通や取引の分量や収支がどうなっているかがわかるような集計や計算処理のシステムさえもっていればいいのであって、実際には地方の人びとが政治を動かすほうが最も理想的であると力説したのです。

ブルードンは権力が大嫌いで、家庭の事情もあつたのですが、権力に近づくことは危ないといつたことを教えた人です。ルソー流の「人民」でも、マルクス流の「プロレタリアート」でも権力を取れば、必ず墮落するといふことを見抜いたのがブルードンです。ところがマルクスは、プロレタリアートが権力を取ることを考えレーニンはそれを実行に移しました。その結果はご承知のとおりです。権力を取ることを自己目的としないようにすること、権力を握るための規則とシステムを用意したこと、ここにシステムとしてのデモクラシーの長所があつたといえます。

このようにナシヨナリズムといったものが日本でもそうですし、ドイツ、イタリア、もつと前をさかのばれば、イギリスもアメリカもすべてナシヨナリズムの思想と動機で動いていた時期があります。ポスト・モダンという言葉は近代デモクラシーを批判し、克服する言葉として用いられることがあります。その意味ではマルクス主義もナシヨナリズムもポスト・モダンのなかに入るといえます。しかし、近代デモクラシーはその当然の対抗思想として社会主義とナシヨナリズムを生んだことを認めるならば、この三つの思想は相い合して一つの環を作っていて、この二

百年または三百年來、人間はこの環のなかに閉じこめられて、生き、苦闘し、そして死んできたことになりました。この環のなから抜け出すことがポスト・モダンの真の課題だとすれば、西洋起源のデモクラシーを単に国家制度として定着させるだけではなく、社会の日常生活のシステムとして定着させる必要があると私は考えます。それは日本の政界の最近の様相、金権汚職、政治家の結びつきなどを見ている者にとっては自明のことです。しかし、それはまた別の機会に論ずることに致します。

(京都市生涯学習総合センター「京都アスニー」所長)